

コロナ禍におけるコミュニティ・スクールの可能性の追究
 ～「防災キャンプ」と「願いよ届け、ランプシェードプロジェクト」の実践を通して

静岡県田方郡函南町立函南小学校
 校長 渡邊 衛

1. はじめに

本校は、創立148年目を迎えた歴史ある学校である。以前は、稲作や果樹栽培等が盛んな農業中心地域であったが、熱函道路や東駿河湾環状道路の開通によって、事業所や大型店舗等が次々に立ち並び、地域の様相は激変した。このような状況にあって、人口の流入も激しく、現在では流入人口が以前からの居住者をはるかに上回り、保護者や地域住民の価値観が多様化してきている。

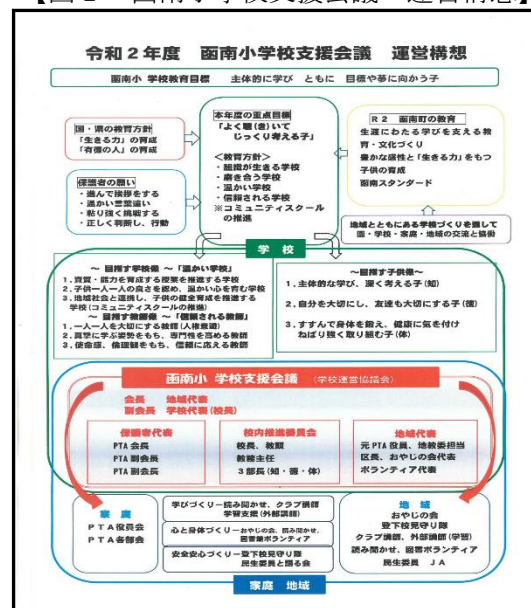
函南町では、平成29年度に丹那小学校と桑村小学校の2つの小学校をコミュニティ・スクールに指定し、保護者や地域住民と連携を図ってきた。そして、令和2年度より町内全ての小・中学校において、「学校運営協議会」を設置し、コミュニティ・スクールの推進することになった。

本校では、「函南小学校支援会議」の名称で「学校運営協議会」を設置し、保護者や地域の方々の声を取り入れながら、「地域とともにある学校」づくりを進めることにした。

本稿では、コロナ禍におけるコミュニティ・スクールの実践として、第5学年「防災キャンプ」と第6学年「願いよ届け、ランプシェードプロジェクト」の取組を検証し、今後の本校のコミュニティ・スクールの可能性を追究することにした。

「函南小学校支援会議」は、新しいものを開拓するのではなく、これまでの既存の仕組みを生かし、学校に関わる全ての人々が当事者意識をもって教育活動に参画できるように次の3つの部に整理した。「学びづくり部」（読み聞かせボランティア、講座制クラブ講師、学習支援講師等）、「心と身体づくり部」（おやじの会、図書館ボランティア等）、「安全安心づくり部」（登下校見守り隊等）の3部は、学校の教育目標を共有し、その具現化に向け、学校職員とともに協働的に取り組むこととした。（下記「運営構想図」参照）

【図1 函南小学校支援会議 運営構想】



2. コロナ禍における「函南小学校支援会議」の実践

(1) 「函南小学校支援会議」の設置

これまで本校では、地域の方を対象に学校公開を実施するなど開かれた学校づくりを進めてきた。しかし、これからはそれを更に進展させ、地域とともに児童をいかに育てていくのかを柱に地域とともにある学校づくりを推進する視点から、令和2年4月に「函南小学校支援会議」を設置した。「函南小学校支援会議」は、函南小おやじの会代表、町消防団分団長、保護者代表、学校関係者等11名の委員で構成した。

(2) 「函南小学校支援会議」のねらい

「函南小学校支援会議」では、学校を支援する取組が充実するとともに、活動に関わる全ての人に次のような可能性が広がることを期待した。

①児童にとっての可能性について

- 「学びや体験活動の充実」
- 「地域の一員としての自覚」
- 「防災意識の高まり」

②教職員にとっての可能性について

- 「社会に開かれた教育課程の実現」

「地域人材を活用した学びの充実」

③保護者にとっての可能性について

「地域で児童が育つ安心感」

「地域の人との人間関係の構築」

④地域にとっての可能性について

「地域の防災体制の構築」

「学校を核とした地域ネットワークの形成」

(3)第5学年「防災キャンプ」の実践

①「防災キャンプ」に向けた準備

本校では、4月8日に入学式と始業式を行ったが、5月末まで新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、臨時休業となった。学校では、コロナ禍における行事の見直しを行った。当初、第5学年では、7月に宿泊施設を利用した1泊2日での「自然教室」を予定していたが、安全対策が十分に確保できないことから見直しをすることになった。6月に開催した第1回「函南小学校支援会議」でその旨を説明したところ、「コロナ禍だからこそ生命の尊さを子供たちに学ばせてはどうか」という意見が出され、第5学年児童を対象とする「防災キャンプ」の素案が生まれた。町消防団分団長が本学校支援会議委員を務めていることから、町消防団の支援を全面的に受けることができることも大きな要因となった。委員は、担当学年の相談役を引き受け、計画の段階から協働的に参画し、函南町役場総務課防災担当にも働き掛け、県や町の行政機関の防災担当者をも巻き込んだ豊かな体験活動へと発展させていった。

②「防災キャンプ」の実施

10月27日、28日の2日間にわたり「防災キャンプ」を実施した。第5学年児童は、「自分の命を守るために自分ができることを増やし、家族や地域の人たちのために働くことができる人を目指す」というねらいのもと「防災キャンプ」に臨んだ。静岡県教育委員会では、「自他の命を守るための適切な判断・行動ができる人」を育てることをねらいとした「静岡県学校安全教育目標」を策定している。今回の本活動は、このねらいの達成をも目指し、本校で策定する学校安全計画と関連付け教科横断的な視点から実践した。

学校では、「防災キャンプ」を実施するにあたり、カリキュラム・マネジメントの視点から、第5学年社会科の国土の自然災害に関わる内容「自然災害は国土

の自然条件などに関連して発生していることや、国や県などがさまざまな安全対策を実施していることを理解し、災害から自らの判断で確実に身を守ることができるようにする」と関連付けて、育成すべき資質・能力を次のように設定した。

「知識・技能の習得」の視点からは、危険に対する情報の理解、簡易的な応急手当の習得、災害メカニズムの理解、備えの大切さの理解の育成を目指し、「思考力・判断力・表現力等の育成」の視点からは、危険回避できる力の育成、避難行動ができる力の育成を目指し、「学びに向かう力、人間性等の涵養」の視点からは、リーダー性と協調性の育成を目指した。そして、これらの資質・能力の育成に、教職員と地域・保護者、外部機関の関係者とで共有し、協働で教育活動に当たった。

実施した内容は、「ふじのくにジュニア防災士養成講座」、「避難所スペース作り」、「放水・水消火器訓練」、「狩野川放水路見学」、「函南町オリジナル非常食試食体験」、「赤十字救急法講習減災セミナー」である。児童は、多くの実体験や本物に触れる豊かな活動を通して、国や県、町の人たちが様々な安全対策を実施していることを本町の状況をもとに理解し、災害から自らの判断で身を守ろうという気持ちをもつことができた。

【写真1「防災キャンプ」『放水訓練の様子』】



(4)第6学年「願いよ届け、ランプシェードプロジェクト」の実践

①「願いよ届け、ランプシェードプロジェクト」に向けた準備

本校では、「おやじの会」が組織されている。「おやじの会」は、本校でPTA役員をされた方々を中心に平成27年にスタートした。立ち上げた趣旨は、「学校行事等に参加する母親は多い。しかし、そこには父親の顔がなかなか見えない。そこで、父親同士がつながり何か楽しいことはできないか。」ということから始まった。毎年、児童が楽しみにしている催しを開催

している。令和元年度には、夏と冬に実施した。夏は、「流しそうめん」と「水鉄砲で遊ぼう」を企画、運営し、多くの児童とその保護者、地区の幼児たちが参加した。冬は、夏に開催される東京オリンピックに倣い「おやじンピック 2020」と称して、いろいろな手作りのゲーム大会を企画、運営し、金メダルを目指し児童と大人がともに競い合い、楽しい時間を過ごした。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症(以下、「コロナ」と略す)の拡大が心配されたため、学校での安全重視の教育活動を尊重し、活動を控えていた。しかし、第6学年児童がこのコロナの影響を受け、小学校生活最後の運動会や修学旅行が取り止めになったことから、「何かしてあげることはないか」という強い想いを抱き、「願いよ届け、ランプシェードプロジェクト」の企画が立ち上がった。

12月から会議を何度も重ね、1月に「願いよ届け、ランプシェードプロジェクト」の素案ができ上がった。当初、和紙と風船を使ったランプシェードの制作と夜間鑑賞会を計画したが、コロナの拡大防止から夜間の鑑賞会を見送り、児童が在学している時間帯に通路を暗くして鑑賞することにした。併せて、新たにペットボトルランタンを作成し、グラウンドに灯したランタンで第6学年児童に向けたメッセージをビデオで撮影し、想いを届けることを計画した。

②「願いよ届け、ランプシェードプロジェクト」の実践

令和3年1月25日に、風船と和紙を使ったランプシェードの作成に取り組んだ。「おやじの会」のスタッフは、1週間前より検温等を実施するなど体調管理に努め、当日を迎えた。「ランプシェード」には、少なくとも児童分82個以上の風船を用意することが必要となる。スタッフは、飛沫による感染を防止するために、機材を使って風船に大気を送り込む手段をとった。児童は、スタッフの指導のもと、思い思いの作品を作っていた。

【写真2「ランプシェード」『ランプ作りの様子』】



令和3年2月19日に「ランプシェード」と「ペット

ボトルランタン」の撮影を行った。ランプシェードを灯す明かりは、学区の協力を得て祭典で使用する電球とコードを借りた。また、「ペットボトルランタン」では、200本近くのランタンを灯し、「がんばろう 2021」のメッセージを創り出した。

撮影した動画には、灯るランタンの明かりとともに、次のメッセージが写し出された。「明日はきっといい日になる／ちょっとイヤなことがあっても／下を向いているなんてもったいない／だから ちょっとだけががんばろう 一緒に／最初は小さな点 だんだん点が集まり線となり 言葉になる／最初は小さな想い 少しずつ想いが集まって言葉となり 想いが伝わる／なりたい自分になろう 好きな自分でいよう」

令和3年2月26日に「6年生を送る会」を開催した。教室から会場に向かう通路に「ランプシェード」は飾られ、自分の作品を一生懸命に探す児童の姿がそこにはあった。また、「ペットボトルランタン」の動画鑑賞では、「わあ、すごい」という歓声が起り、満面の笑顔が見られた。今回の「願いよ届け、ランプシェードプロジェクト」の開催は、6学年児童にとって大きな思い出となるとともに、スタッフの想いが確かに届いたことを確信し、地域と連携し取り組むことの大切さを体感した。そして、今回の取組は、学校便りとHPを活用し、保護者や地域住民に広く紹介した。

【写真3『ランプシェードとペットボトルランタン』】



3. 成果と課題

本校児童を取り巻く環境や学校が抱える課題は、年々多様化し複雑化をもちてきており、学校と地域の連携の重要性は重要なものとなっている。本校では、学校公開や学校便りの地区への回覧、学校HPを充実・活用する中、広く地域に教育活動の広報に努めてきた。しかし、こうした「開かれた学校」から更に前進し、「地域とともにある学校」への進展を目指し、令和2年度に「学校運営協議会」を設置し、コミュニティ・スクールの推進を図った。

本校では、令和元年度より「『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善をカリキュラム・マネ

ジメントにつなぎ、資質・能力の育成を目指して」をテーマに学校運営に取り組んでいる。育成すべき本校児童の資質・能力を学校と保護者、地域社会とで共有し、「函南小学校支援会議」をカリキュラム・マネジメントの柱の一つに位置付けたのである。

令和2年度より学習指導要領が全面实施されたことを受け、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、これからの時代を生きる児童の育成すべき資質・能力の伸長を目指すという目標を学校と保護者、地域社会とが共有し、コミュニティ・スクールを柱に教育活動に当たることにした。しかし、このコロナ禍の中、地域や外部からの人材をいかに活用していくのか、とても厳しい状況下でのスタートとなった。

そうした中、第5学年が実施した「防災キャンプ」の実践は、コミュニティ・スクールの機能が大いに発揮したものと評価できる。6月に開催された「函南小学校支援会議」での協議が、単に話し合いで終わることなく、町消防団分団長である委員が学校と地域や行政機関との橋渡しとなり、学校職員と協働で教育活動の推進に当たったのである。

児童の振り返りには、次のような意見が綴られていた。

「消防車からの放水体験をして、放水のたいへんさを知りました。ホースから水が出てくるときは、とても重く感じました。しかし、実際の消火活動での放水は今日の五倍近くもの放水量であるという話をうかがいました。とても驚きました。いつも函南町を守っている消防団の皆様のありがたさを知ることができました。この『防災キャンプ』では貴重な体験ができてよかったです。自分が大人になったとき、町のみんなの役に立つ仕事がしたいです。」

多くの児童は、豊かな体験活動から、防災への意識を高め、地域の一員としての自覚を芽生えさせたことが伺える。また、教職員については、地域の人材を活用した学びの充実を展開させる中、「社会に開かれた教育課程」の実現の具現化を図ることができたものとする。最後に、保護者や地域社会にとっては、地域で児童が育つ安心感や未来の地域の防災体制の創造に成果があったものと推察される。

「願いよ届け、ランプシェードプロジェクト」の実践についても、本校のコミュニティ・スクールのもつ可能性が大いに発揮できたものとして評価できる。「お

やじの会」の存在意義は、これまでも大きかった。休業日に児童が楽しむ催しものを企画・運営することは、少年団等のクラブチームに所属することのできない児童にとって大きな喜びとなっており、地域で子供を育てるという視点からも大きな役割を担っていた。そうした「おやじの会」が、コロナ禍において、第6学年児童を喜ばせたいという思いのもとに、新しいものにチャレンジし、そのねらいを達成したのである。「ランプシェードプロジェクト」を終えた児童は、次のように思いを綴った。

「今回、すてきな動画を見てとてもうれしく思いました。たいへん感動しました。自分たちが一生懸命作ったランプシェードはとても輝いていました。そして、笑顔になりました。今度は、自分がみんなに笑顔が届けられる人になりたいと思います。そのような人になれるようにこれからの人生をがんばって生きたいと思っています。」

今回の「ランプシェードプロジェクト」の実践を通して、児童は地域の方々の温かさを強く感じ、勇気づけられ、将来の自分の生き方にまで思いを寄せたのは大きな成果であった。

函南小学校の特色を生かしたコミュニティ・スクールを継続していくには、人材の確保が必須である。今後も、「社会に開かれた教育課程」の理念を大切に、学校と保護者、地域社会が連携し、学校教育目標の具現化に向けた取組を推進していくことが求められる。

4. おわりに

函南小学校は、コミュニティ・スクールがスタートしたばかりである。今回のコロナ禍という厳しい状況の中で生まれた実践から、「函南小学校支援会議」の未来に向けての大きな可能性を確信した。令和3年度の「防災キャンプ」では、新たに国土交通省と連携した防災教育に取り組む夢を描き、準備に入った。狩野川や来光川と暮らしの関わりを正しく理解し、地域への愛着心を育て、自然災害に関する心構えと知識を備え、主体的に危険を回避する判断力を備えた児童を育成する取組へと発展していくのである。

今後も、地域社会との良好な関係を構築し、地域人材や資源等を生かした学校運営に、「函南小学校支援会議」を核として創造力をいかに発揮し、その可能性を信じ取り組みたいと考える。